

精神保健福祉分野のエンパワーメント・アプローチに関する考察

古 寺 久仁子*

抄 録

エンパワーメント・アプローチは、近年精神保健福祉分野で注目されているアプローチの1つである。エンパワーメントは、スティグマ化されてパワーを奪われた人びとや集団、コミュニティが、個人的・社会的（対人関係的）・政治的なパワーを取りもどし、強化することを目指す、その過程である。特に精神保健福祉分野では、組織運営の様々な場面に精神障害をもった人々の参加が求められる。また、人と環境のストレンクスやソーシャルワーカーとの対等なパートナーシップの重視など、従来のソーシャルワーク実践とはその強調点が異なることを確認した。一方、リカバリー概念は、エンパワーメントをその重要な要素のひとつに位置づける。リカバリーは個人的な体験を重視する主観的な志向が強く、コミュニティレベルや政治的なエンパワーメントへの言及が少ないことを指摘した。今後、リカバリー概念が障害学などの関連理論との整理によって理論的に発展することを期待したい。

Key words : エンパワーメント・アプローチ パワー ストレンクス リカバリー 精神保健福祉

はじめに

わが国の精神保健福祉は、1980年代以降政策・実践とも大きな変化を遂げている。精神衛生法から精神保健及び精神障害者の福祉に関する法律への法的な変遷や、病院中心の医療システムから地域生活中心のシステムへの移行といった政策展開はもとより、実践において地域生活の重視や、医学モデルから生活モデルへ、サービス提供者主体から利用者主体へのパラダイム・シフトが指摘できる。

このパラダイム・シフトに大きく影響を与えた概念に「エンパワーメント」¹⁾、「ストレンクス視点」もしくは「ストレンクスモデル」²⁾、「リカバリー」²⁾がある。

本論では、上記の概念のうち、わが国に最初に紹介されたエンパワーメントに注目した。エンパワーメントは、ソーシャルワーク実践における利用者像を、「ソーシャルワーカーなどの専門家の保護と治療が必要な無力な人」から、「ストレンクスのある存在」へと変化させる理論的根拠となったが、十分に研究されているとは言い難く、定義もあいまいなままに使用されている。

一方、「リカバリー」は1990年代に生まれ、近年アメリカやカナダなどでは、「リカバリー」概念に基づいて精神障害をもつ人々³⁾の支援の方法を

* Koderia, Kuniko
ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科社会福祉学専攻博士後期課程在学
都立多摩療育園 ソーシャルワーカー

問い直し、積極的に精神病の体験を生かす方向へと、その精神保健システムを転換してきた。「リカバリー」概念においては、エンパワーメントが重要な要素であると考えられており（Anthony=1998, Corrigan and Ralph 2004 : 11, Ragins=2005 : 28-30）⁴⁾、現時点でエンパワーメント・アプローチの意義を確認し、「リカバリー」との関連を整理しておく必要があると考えた。

そこで本論では、北米とわが国でソーシャルワークの立場から論じているエンパワーメント関連文献を中心に文献研究を行い、エンパワーメントの概念やその概念形成の背景を整理し、実践原則やその意義を検討し、精神保健福祉分野におけるエンパワーメント・アプローチについて考察を加える。その上で、リカバリー概念や障害学などとの関連や今後の理論的な可能性についても検討する。

エンパワーメント・アプローチの文献研究

1 エンパワーメント概念の背景

エンパワーメント概念が生まれた背景として、特にアメリカでは2つの潮流を指摘することができる。一つは非植民地化運動、アフリカ解放運動、女性運動、市民運動、ブラックパワーや貧困者パワーといった社会的・政治的・経済的運動の影響であり、もう一つはグループワークをはじめとしたソーシャルワーク実践理論の影響である（稲沢 2003, Simon 1994, Lee 1994, Lee 1996, Segal, Silverman and Temkin 1993, 久保 1995, 三毛 1997）。稲沢は、この両者の流れを「運動理念から援助理念へ」と整理している（稲沢 2003）。筆者は運動理念としてのエンパワーメントと、実践理念としてのエンパワーメントに分けて論じる。

(1) 社会的・政治的・経済的影響；運動理念としてのエンパワーメント

1950年代半ばから1960年代にかけてアメリカの公民権運動（黒人解放運動）では、エンパワーメントを運動理念として用いた。そこでのエンパ

ワーメントは、「社会的な差別や抑圧によってさまざまなパワーが奪われた黒人たちが自らコントロールするためのパワーを取り戻すプロセス」を意味していた（稲沢 2003）。

この公民権運動（黒人解放運動）は、60年代以降のフェミニズムや同性愛者解放運動、市民運動（消費者運動）の隆盛、自立生活運動に象徴されるセルフヘルプ運動、貧困との闘いなどにも大きな影響を与え、これらの反差別・反抑圧運動のキーコンセプトとしても「エンパワーメント」は広く用いられた。これらの運動の背景には、1960年代にケネディ大統領が公民権法を立法化し、貧困に対する福祉政策を実施したこと、1980年代から90年代のレーガン、ブッシュ政権が社会サービスへの財政支出を削減し、非白人のくびと、女性や移民の市民権を縮小したことなど、政治状況の影響があると言われている（Lee 2001, Simon 1994, 久保 1995, 三毛 1997, Zippay 1995, 窪田 1995）。

(2) ソーシャルワーク理論の影響：実践理念としてのエンパワーメント

エンパワーメントをソーシャルワークの領域で最初に援助理念として規定したのは、1976年のSolomonの著書*Black Empowerment: Social Work in Oppressed Communities*である。Solomonはエンパワーメントを、「スティグマ化された集団の構成メンバーであることに基づいて加えられた否定的な評価と差別的な待遇によってつくられたパワーの欠如状態（powerlessness）を減らすことを目的に、ソーシャルワーカーがクライアントとともに取り組んでいく過程」と定義した（Solomon 1976: 19）。

Leeは、Jane Adamsをはじめとするセツルメント運動の社会平等、社会正義、社会改革に対する情熱や思想と、そのグループワークの方法論や世界的、地域的なアクションがエンパワーメント・アプローチの土台になったとする。さらに19世紀のアフリカ系アメリカ人や他のマイノリティ集団の女性クラブや社会改革活動、初期のグループワークの研究者であるGrace Coyleなどもエンパワーメントに影響を与えたと述べている（Lee

1996 : 221・224)。

また、1930年代に精神分析学やフロイト心理学の影響を強く受け、セラピーに傾斜したケースワーク実践が主流になる中で、Reynolds はソーシャルワークと社会経済的事象を結びつけて考え、精神分析的ケースワークと市民参加や資源配分による平等を求める民主主義とソーシャルアクション的世界観を結びつけた (Lee 1996, 和気 2005)。1960年代から1970年代初めには専門的ソーシャルワーカーが用いる実践アプローチが抑圧的なシステムや環境への適応を強調すること、クライアントの状況に含まれる政治的・歴史的・経済的・文化的・社会的な側面よりも、クライアントの心理的な側面に問題の所在を求める傾向に多くの批判が向けられた。これらのインターベンションによってクライアントのパワーを剥奪してきたという指摘は (Cox and Parsons=1997 : 100・101), ソーシャルワーカーとクライアントの関係を問い直すことを強調した (谷口1999, 三毛1997)。

1980年代以降エンパワーメント・アプローチは黒人だけでなく、同じように抑圧されてパワーの欠如状態 (powerlessness) におかれている高齢者、障害者、児童やホームレスの人々、エイズ患者等への援助に試みられるようになり、ノーマライゼーションの理念 (久保 1995), Germain と Gitterman のライフモデル, Galper のラディカル・ソーシャルワーク・モデル, Schwartz の媒介モデル, Compton と Galaway の問題解決モデル, Malcio のコンピテンスを志向するモデル, Middleman と Goldberg の構造アプローチや Saleebey のストレングス視点, Friere の社会認識教育, およびセルフヘルプとソーシャルサポート・ムーブメントなどの実践モデルなどからも影響を受け、発展してきた (Cox 1989, Cox and Parsons=1997 : 44・45, Lee 1994, Lee 1996 : 225, Simon 1994)。

精神保健福祉分野でも、身体障害を持った人の自立生活運動の隆盛を背景に、伝統的なケアモデル、つまり、専門家主導による精神疾患モデル (医学モデル) あるいはリハビリテーションモデルへの批判が起こり、セルフヘルプ活動によるエンパ

ワメント実践が行われるようになってきた。このセルフヘルプ活動によるエンパワーメント実践では、精神障害をもった人の役割を専門家にコントロールされる患者役割から、コンシューマーに転換し、問題は個人にあるのではなく、環境とリハビリテーション・プロセスにあると規定した (Segal, Silverman and Temkin 1993)。

2000年の国際ソーシャルワーカー連盟 (IFSW) の総会で示されたソーシャルワークの定義の中にも、エンパワーメントが明示されるなど、エンパワーメントは現代のソーシャルワークにおける中核的価値に位置づけられた重要な概念となっている (栄 2005)。

これらの流れを受けてわが国には、1990年代半ばからエンパワーメントに関するアメリカやイギリスの実践や文献が紹介されるようになった。その後、厚生労働省が2003 (平成15)年に導入した障害者ケアマネジメントの基本理念でも「エンパワーメントの視点による支援」が明記され、精神医療や精神保健福祉関連の学術誌でもエンパワーメントを題材にした論文が多く掲載されるようになった。実践理念としてのエンパワーメントは、我が国のソーシャルワーク実践や政策にも急速に取り入れられるようになってきていると言えよう。

2 エンパワーメントの定義

エンパワーメントの概念はソーシャルワークの価値、プロセス、目標、ゴールなどさまざまに定義され (Browne 1995, 三毛 1997), 曖昧で一致した定義がない (久保 1995, 久保 2001, 窪田 1995, 三毛 1997, Hirayama and Hirayama 1999, Chamberlin 2005, Gutiérrez, GlenMaye and DeLois 1995)。

GutiérrezやParsonsはグループワークをエンパワーメント実践の中核として考えた。Gutiérrezはエンパワーメントを「個人がその生活状態を改善する行動を起こすことができるように、個人的、対人関係的、政治的な力 (power) を強める過程」 (Gutiérrez 1990) と位置づけた。また、エンパワーメントは使われる場面によっても意味合いが異なる

り、マクロレベルでは「集団的政治的パワーを強めるプロセス」、ミクロレベルでは、「構造的な解決による実際の変化なしに、コントロールまたはパワーを強めたという個人的な感情を発達させること」、さらに「ミクロレベルとマクロレベル双方を調和させる個人のエンパワメントと集団のエンパワメントとの相互作用に注目したもの」があるとし、Gutiérrezはこの3つめの立場を採用している（Gutiérrez 1990）。

Parsons は、エンパワメントは成果であるとともに、仲間意識の確認や共通性の人生観から生まれてくる結果や過程であるとして、集団の重要性を強調した（Parsons 1991）。

Staplesは精神保健システムにおけるコンシューマーのエンパワメントについての論文の中で、エンパワメントを「社会の中で従属的な位置に置かれた人々と集団が、資源を手に入れ、セルフイメージを高め、心理学的、社会文化的、政治的、経済的領域の利益のために行動する能力（capacities）を獲得していくために、パワーを身につけ、促進し、認めていくプロセス」（Staples 1999：120）とした。

Lee は、エンパワメント実践の概念枠組みを7つの視点、8つの原則で提示した。7つの視点とは、抑圧に関する歴史的な視点；集団の抑圧とそれに関連した政策の歴史を知ること 生態学的な視点；個人の潜在的な適応力に関する知識や、パワー、パワーの乱用と抑制、構造的な不公平や社会経済的な冒流に関する知識を含む 民族や階級的な視点 文化的・多文化な視点；規範やニュアンス、クライアントの民族的背景による可能性に注意を払うこと フェミニストの視点 世界的な視点；この視点は世界的な相互依存に注目させ、社会的経済的不公正は世界的な規模の問題となっていることを認めさせる。社会的排除は、世界的な視点から生まれた概念であり、パワーの欠如状態と不公正を含んでいる。現状を分析する批判的な視点である。8つの原則は次の通りである。ソーシャルワーカーとクライアントは生活を破壊するすべての抑圧に挑戦すべきである。

ソーシャルワーカーは抑圧の状況について全体論的（holistic vision）に理解すべきであり、「木を見て森を見ず」ということにならないようにしなければならない。クライアントは自分自身でパワーを増強すべきであり、それをソーシャルワーカーは側面的に援助すべきである。共通の地盤を共有しているクライアントは、相互にパワーを増強していくようにすることが必要である。

ソーシャルワーカーはクライアントと対等な関係を確立すべきである。ソーシャルワーカーはクライアントが自分なりの言葉で語るよう励ますべきである。ワーカーは一貫して、クライアントを抑圧による被害を受けている者としてではなく、抑圧に打ち勝っていく者として見ていくべきである。ソーシャルワーカーは一貫して、社会的変革を中心にすえていくべきである（Lee 1994：26・28、Lee 2001：49・50、59・61、小松 1995）。

久保は先行論文をもとに「エンパワメントは、社会的存在であるクライアントが社会関係のなかで社会的役割を遂行し、自己決定権を行使して行くべく、~~力~~個人的、社会的、政治的、経済的）を獲得することを目的とした援助実践の過程であり、それは個人レベル、社会レベルの変化をもたらすことになる。エンパワメント実践はワーカーとクライアントの協同作業である」と定義した（久保 1995）。

また栄は、精神保健福祉分野におけるエンパワメントアプローチを「パワーレスな状態にあるクライアントが、自己の価値観や考え方が尊重されるなかで、自らの力や権利意識、自己統制感を高め、自己をパワーレスにさせている社会を改革できるようになることを目指して、ソーシャルワーカーがクライアントを個人的、対人関係的、および社会的に支援していくアプローチ」と定義した（栄 2003）。

大谷は、精神障害者を対象としたエンパワメントを「抑圧された状況を内在化させることのないよう、批判的知識を共有し個人・集団（対人）・地域（政治）レベルで力をつけていくプロセスである。そのプロセスにおいて、PSWは個人と地域

が持つ力に焦点を当て、当事者とパートナーシップを築きつつ共通の目標に向けて活動するものである」と整理した(大谷 2004)。

以上の文献から、筆者はエンパワーメントについて、次のように考える。生態学的な人と環境との相互作用の理解を基盤とし(Lee 1996:219)、「スティグマを負った人々」(Solomon 1976)「抑圧されたグループのメンバー」(Lee 1996)である人々や集団、コミュニティが、「パワーの欠如した状態(powerlessness)」(Cox &Parsons 1994, Gutiérrez 1990, Solomon 1976)にあるとき、そのような個人と集団、コミュニティが、ソーシャルワーカーとの対等なパートナーシップを媒介に、個人的・社会的(対人関係的)・政治的なパワーを取りもどし、さらに強化していく過程であり、それが可能になることを目指すものである。

しかし、筆者のこの定義では、コミュニティのエンパワーメントの規定が不明確である。これまで挙げた先行文献も、特に日本の研究者のものは個人のエンパワーメントへの言及が中心となっている。エンパワーメントは社会構造の変革を一つの目標とし、環境の変容と自己の強化の視点が必要(Lee 1996:229)とされ、「エンパワーする活動は、個人の強化以上にコミュニティをエンパワーする」(Lee 1996:234)ものである。エンパワーメント・アプローチは発展途上国の開発援助や貧困地域といったコミュニティレベルにも用いられており(久木田 1998)、今後コミュニティにおけるエンパワーメントについても明らかにできる定義を検討すべきであろう。

3 エンパワーメントの鍵概念

エンパワーメントを理解するうえで重要な概念が、パワーとストレングスである。

(1) パワー

エンパワーメントはパワーを獲得し、強化することを目的とした活動であり、プロセスである。それゆえにエンパワーメント・アプローチにおいて、パワーの概念を理解することが重要である。

パワーについて、Pernellは「効果的に行動あるいは成し遂げるための能力または潜在能力」(Pernell 1986:117)と定義した。平山らは、パワーを「直接的間接的に影響し、他の人々を変える能力」(Hirayama and Hirayama 1986:119)あるいは「影響力、生活の自己管理能力」(平山尚 1998:161)とする。

久保はパワーの構成要素を、資源の所有と関係性であると整理した。パワーは社会的、経済的、政治的側面を持っており、他者あるいは社会システムとの関係性の存在が前提となる(久保 1995)。狭間も久保と同様に、資源と関係性という点で整理し、第一にパワーは保有する資源の種類、保有の程度と関連する、第二にパワーは常に対象とするものとの関係でとらえられるとした。つまり、パワーは常に社会関係、社会構造の中に位置づけられ、他者を伴う概念である(狭間 2001:153)。

Gutiérrezらは、パワーは個人的レベル(個人的な事柄を解決したり、影響を与える能力に関する感情や認知)、対人関係的レベル(問題の解決を促す他者との経験)、環境的(セルフヘルプの努力を促進したり、妨害する社会的制度)の3つのレベルで生起し、個人の人生行路に影響を及ぼしていく能力、自己の進化を表現していく能力、公的な生活の諸側面を統制するために他者と協働していく能力、公的な意志決定メカニズムにアクセスしていく能力といえる(Gutiérrez,Parsons & Cox=2000:9・10)。

Leeは批判的な意識と抑圧についての知識がパワーであり、対人関係的には願わしい資源とゴールを獲得するために他者に影響する能力とした(Lee 1994:24)。

このようにパワーは人が自分と自分の生活を変えていく力であると同時に、他者や社会システムとの関わりの中で、影響を与えあっていく力である。

一方、Hirayama and Hirayamaは、エンパワーメント・アプローチを日本に導入する際の課題を整理する中で、日本人とアメリカ人のパワーのとらえ方や対人関係でのパワーの行使の仕方の違い

を指摘している(Hirayama and Hirayama 1999)。今後日本的なパワーの概念を定義づける必要があるだろう。

(2) ストレngths視点

エンパワーメントに基づくソーシャルワーク実践が展開する過程で、医学モデルや病理モデルよりも、健康や強さの側面を重視するストレngths視点の必要性が強調されるようになってきた。

Saleebeyは、ストレngthsを潜在能力(capacities)、資源(resources)、利点(assets)といった鍵概念で表現する(Saleebey 2002: 84-87)。狭間はこれを参考に、ストレngthsとは個人や集団、コミュニティが潜在的に持つ総合的な力を意味していると説明している。(狭間 2002: 158-161)。

Cowger and Snivelyは、クライアントのエンパワーメントはソーシャルワーク実践の中心であり、クライアントのストレngthsは、エンパワーメントのための燃料とエネルギーであると言う。(Cowger and Snively 2002: 108-110)。

一方、エンパワーメントを志向するケースマネジメントの一つに、Rappのストレngthsモデルがある(Manning=2000: 131, Rapp, Shera and Kisthardt 1993: 728)。ストレngthsモデルでは、重篤な精神疾患を有する人々は学習し成長し変化し続けることができるという絶対的信頼をもとに、クライアントのストレngthsに焦点をあてる。また、個人のストレngthsだけでなく、環境のストレngthsにも焦点をあて、地域を資源のオアシスとしてとらえることを原則としている(Rapp=1998: 65-77)。濱田は、個人のストレngthsは熱望(aspirations)、能力(competencies)、自信(confidence)であり、環境の強さは資源(resources)、社会関係(social relations)、機会(opportunities)であると説明する(濱田 2001)。

このようにソーシャルワークにおいて、エンパワーメントとストレngths、あるいはストレngths視点とは密接な関係にある。この関係性については必ずしもコンセンサスがあるわけではなく(和気 2005)、どちらを主体に論じるかによってそ

の関係性が変わってくる。例えば、ストレngths視点を中心に論じると、エンパワーメントはストレngths視点の下位概念として規定される(Saleebey 1996)、エンパワーメントはストレngthsモデルによって育成された状態(Rapp=1998: 42, 78)と言われるが、エンパワーメントの論者は個人あるいは環境のストレngthsはエンパワーメントを進める重要な構成要素であるとする(Gutiérrez, Parsons & Cox=2000, Lee 2001など)。小松が指摘するとおり、エンパワーメント・アプローチとストレngths視点に基づくソーシャルワーク実践は、当初から不可分な関係にあるものとして出発しており(小松 1995)、ストレngths視点に基づく試みとエンパワーメント実践は補強し合いながら発展してきており、どちらが上位概念かといった議論は無意味かもしれない。

ストレngthsは個人や集団、コミュニティが潜在的に持つ総合的な力である。パワーが個人の状態だけでなく、他者や社会との関係性の中で説明されるのに対し、ストレngthsは個人的な判断を含む主観性の強いものと考えられる。

4 エンパワーメントの過程

ここでは先行論文で過程またはプロセス(process)と説明しているものを検討する⁵(DuBois & Miley 1999: 212, Lee 1994: 120-154, Gutiérrez, Parsons & Cox=2000: 5-6, 久木田 1998)。

この検討において、下記の共通点を確認できた。クライアントの課題を単に個人の問題としてとらえるのではなく、外的な要因(Gutiérrezら)、抑圧(Lee)、構造的な問題(久木田)ととらえること、ソーシャルワーカーがエンパワーメントの過程を進めていくのではなく、クライアントとのパートナーシップ(DuBoisら)や相互の共有と支援(Gutiérrezら)による、クライアントが責任をもち、ソーシャルワーカーは支援する(Lee)、対話(DuBoisら, Lee)や集団的な体験(Gutiérrezら)を通して問題を定義し、行動を起こしていくという点である。Gutiérrezらが「過程(process)」として述べているものは、それが行われる順序や

重要性の優劣を想定していない構成要素であり、ここで確認できたものも各論者に共通するプロセスを構成する要素である。

相違点には段階のとらえ方がある。Leelは、アセスメントが常に行われるということ以外は、準備期から終結期までのソーシャルワークの流れに沿って説明しており、久木田のモデルは、発達の概念的な枠組みを用いて、「エンパワーメントはある一定の順序で行われる」というものである。すなわち、第一段階「基本的ニーズ」を充足するレベルから、第二段階リソースへの「アクセス」の確保レベル、第三段階構造的な問題の「意識化レベル」、第四段階意思決定への「参加レベル」、第五段階パワーの「コントロール」による価値達成レベルと、順に次の段階へと上昇していく中で質の高いパワーを獲得していくと説明する。これはGutiérrezらが「基本的な問題解決のための活動」に表した4つの次元(Gutiérrez, Parsons & Cox=2000:19-24, 表1参照)に近いが、Gutiérrezらの4つの次元は段階ではなく、個人的、対人関係的、政治的側面に関わる諸要因の連続体に対する介入の焦点のあて方であり、久木田のモデルとは概念枠組みが異なる。そのため、「当面のニーズの充足」(久木田の第一段階)に焦点があてられる次元1でも、久木田の三段階にあたる意識高揚への働きかけが始められる。Gutiérrezらはこれらの4つの次元における課題は同時に進行するかもしれないし、直線的あるいは連続的な関係にある必要もなく、介入はどの次元でも始められるとし、複数の次元の介入が同時に行われる例をあげている。

エンパワーメント・アプローチにおける介入を考えると、久木田はパワーの発達段階のモデルを提示しているのであって、介入に「一定の順序」があるとしているのではない。Leeの説明する準備期、初期、中期、終結期というソーシャルワークの過程が、Gutiérrezらの4つの次元において行われると整理できる。

精神保健福祉分野におけるエンパワーメント・アプローチ

1 精神障害をもつ人びとのパワー喪失の要因

精神障害をもつ人びとのパワー喪失の要因については、栄とManningが言及している(栄 2005, Manning=2000:116・123)。

栄は、CoxとParsonsが高齢者のパワー喪失に寄与する要因を分析した枠組みを援用して、分析を行った。Coxらは個人と環境の継続的な相互作用によって、無力化(powerlessness)が起こるとした(Cox and Parsons=1997:20)。栄は精神障害をもつ人々のパワーの喪失に関連する要因を、個人的要因と環境的要因に分け、個人的要因としては心身機能の低下、社会生活の経験不足、内なる偏見、情報不足、長期入院による適応力の低下、有用感の喪失、サポート・システムの喪失、経済力の低下を挙げ、さらに環境的要因として、消極的な精神保健福祉施策、欠格条項などの制度的障壁、精神障害者に対する社会の無理解、特異な医療環境、医学モデルにおける専門職主導型の治療関係、犠牲者への非難、継続的な世話を示した。これらの個人的要因と環境的要因の相互作用によって、依存が増大し、不利な集団への帰属が進み、これらの抑圧を内面化する一方で、社会からの差別が加えられ、社会的貢献、社会参加の機会と自立が喪失するとした。

Manningの分析では、医学モデルにおける専門職主導の治療関係、強制的な治療やインフォームド・コンセントの欠如などの特異な医療環境、犠牲者への非難⁶⁾、内なる偏見と社会の無理解、経済力の低下、有用感の喪失、孤立無援化と無力化を学習することを、パワー喪失の要因としており、これらは栄と一致する。Manningは、施設が権利や適切なケア、サービスの利用を保障できないことも指摘する(Manning = 2000:116・123)。これは日米の精神保健福祉サービス供給体制の共通の課題であり、重要な点だが、栄の分析には明確に表現されていない。

また榮の分析では、個人的要因の中に、内なる偏見や長期入院による適応力の低下など、社会システムや精神医療システムとの関係の中で起こる抑圧や喪失したパワーが含まれている。このように精神障害をもつ人びとのパワー喪失は、Cox と Parsons の高齢者の枠組みによって個人的要因と環境的要因に二分しきれない要因が見られる。筆者は心身機能の低下のような疾患や障害の直接的な影響のみを個人的要因とし、社会システムの影響された個人的側面要因は、環境的要因との間に位置づけ、3つの要因に分けて分析する必要があると考える。

一方、Manningの分析には、榮が第一にあげたような「消極的な精神保健福祉施策」はない。精神科病床が諸外国に比べて非常に多く、本人の意思によらない入院形態が存在し、精神保健福祉施策が医療施策に偏重していることは、我が国特有の課題と考えられる。

2 精神保健福祉分野のエンパワーメントにおいて重要な構成要素

精神障害をもった人々の経験からエンパワーメントの特質及び構成要素を抽出した調査研究 (Chamberlin 2005, Manning, Zibales-Crawford and Downey 1994, Manning, Parsons and Silver 1997, 田中 2001) について検討した⁷⁾。(表2参照)

これらの調査が共通して抽出した要素は、意味ある社会的な役割をもつこと、コンシューマー自身が援助者となるなどの他者への貢献、学ぶこと Learning、教育 education の重要性、自己決定、自分の価値と可能性を信じること、グループへの参加、カミングアウト(告白、公にすること)、スピークアウト(体験や意見を自由に語ること)の強調であった。Manningらの2つの調査は、パワーの要素を抽出していた。

田中は、開かれた性格、病識の存在、等身大の自己評価といった個人の要素を多く抽出しているが、筆者は個人の要素を強調することが個人の問題点を指摘することにつながり、欠損モデルの視点に戻る可能性があることを危惧する。

Manningは精神保健福祉分野のエンパワーメントの構成要素について、Gutiérrezらによるエンパワーメントの過程、すなわち自己決定、コミュニティ、批判的思考、活動に一致する (Manning = 2000 : 126) と述べているとおり、精神保健福祉分野に特徴的なものは少なく、他分野のエンパワーメントとの共通が多い。一方、精神障害をもつ人々のエンパワーメント特有の要素は、自分の価値と可能性を信じることと、カミングアウトあるいはスピークアウトの重要性と考えることができる。精神障害をもつ人々がスティグマに対抗し、社会的偏見を内面化しないために、自分の価値と可能性を信じ、カミングアウトをすることが、パワーを獲得する前提として必要なのであろう。

3 エンパワーメント実践原則

精神障害をもつ人々のエンパワーメント実践原則について述べているManning, Staples, 榮の文献を検討した (Manning = 2000: 139-141, Staples 1999 : 129-132, 榮 2005 : 172-173)。

Manningは、精神保健コンシューマーの視点を提示したうえで、エンパワーメント実践の原則について、ソーシャルワーカーの態度、利用者との関係、ソーシャルワークの役割の3つに体系づけて述べている。さらに Manning は、精神保健システムにおけるエンパワーメント実践では、欠損モデル志向からストレングスモデル志向へ、専門家としてパワーを押しつけるあり方から、コンシューマーとパワーを共有していくあり方への転換、つまり、サービス提供者主導のケア提供モデルからクライアント主導のモデルへの転換を求めている。

Staples は精神保健システムにおけるコンシューマー・エンパワーメントの実践原則とコンシューマー・エンパワーメントを組織的にサポートするガイドラインを作成した。このガイドラインでは、プログラムのデザインからアセスメントやスタッフの雇用まで全ての過程に直接的、中心的にコンシューマーを参加させること、全ての管理運営プログラムと諮問委員会に過半数のコンシューマー

を任命すること、コンシューマーがスタッフの一員になることを奨励すること、アドボカシーや互助を重視すること、コンシューマーがサービスを監視し、評価する公的な構造とプロセスをつくることが含まれている（Staples 1999）。

Staples の実践原則、栄の PSW として不可欠な実践原則、及び Lee による 8 つの実践原則（Lee 1994）を加え、精神保健福祉分野のエンパワーメント実践の原則を以下のように整理した。

抑圧（Lee）、あるいは個人の問題と組織的なパワーの関係を理解する（Staples）。

個人だけではなく、環境も含めて全体的にみる（Lee, Manning）。

精神保健福祉コンシューマーは自分の生活を改善し、地域社会に貢献し、環境を変えていくストレンクスや権利、能力がある人である（Manning, 栄）。

精神保健福祉コンシューマーが意識高揚、批判的分析を促進（Staples）し、意思決定し（Manning, Staples）、自己効力感を強めることの重要性と、そのために学ぶこと、情報を得ること（Manning, Staples）、選択肢があること、そしてスキルを身につけること（Manning）。

ソーシャルワーカーとのパワーの共有とパートナーシップ（Lee, Manning, Staples, 栄）、プロセスへのコンシューマーの参加（Manning, Staples）を重視する。ソーシャルワーカーは「専門家」として何かを「してあげる」のではなく、精神保健福祉コンシューマーが自身でパワーを増強するのを、側面的に支援する（Manning）。

コミュニティの変化や社会変革を目指す（Lee, Manning）。

4 精神保健福祉分野におけるエンパワーメント・アプローチについての考察

以上の検討から、精神保健福祉分野のエンパワーメント・アプローチにおいて、重視すべき視点と原則をまとめる。

（1）視点

社会構造との関係性において、個人や集団、コミュニティがパワーを喪失する抑圧の構造の視点

個人が社会に対して貢献することや環境変容を含めて、個人と環境を全体的に捉える視点。ストレンクス視点にたち、人間の主体性・潜在的な能力、クライアントのこれまでの生活での経験知への絶対的信頼に基づく。

ストレンクスは人だけでなく、環境にもある。定義される問題は精神障害をもった人びと自身にあるのではなく、社会システムとの相互作用のなかで生まれるものであるという理解に基づく。

（2）実践の原則

サービス提供者中心ではなく、コンシューマー主導の実践へと転換させる。

精神障害をもつ人々とソーシャルワーカーとの関係を協働とパートナーシップに基づくものに捉え直す。

ソーシャルワーク実践の基本として当然のことではあるが、エンパワーメント・アプローチにおいてもまず、精神障害をもつ人々の基本的なニーズを満たすよう社会資源との仲介を行う。エンパワーメント・アプローチでは資源の所有はパワーであり、基本的なニーズを満たすことによって、エンパワーメントの動機づけを促進することができる。精神障害をもつ人々との対話を通して、問題を定義し、個人的に、集団の中で、社会的な場で語ることに支える。

精神障害をもつ人々が情報を得たうえでの選択と自己決定を重視する。その過程で、彼ら自身が自分の生活をコントロールできる感覚や、自己効力感を高めることができる。

個人的、対人関係的、社会的政治的なパワーを獲得するために、ともに学ぶ。また、精神障害をもつ人びとがパワー獲得のために必要なスキルを身につけていくことを支援する。

アドボカシーの重要性については、精神医療現場での人権侵害の歴史や現状から、疑問の余地はないが、ソーシャルワーカーの役割の確認や、システムの整備だけでなく、セルフアドボカシーを検討する必要がある。

自助グループなどの当事者組織の組織化や、グループとして力をつけていくために支援する。例えば、ピアカウンセリングなどの導入などである。

サービス提供の組織運営について、コンシューマーが関与し、コンシューマーによる統制が行われるようにする。

考 察

1 これまでの実践理論との異同とエンパワーメント理論の意義

Simon は、エンパワーメントという用語がない時代でも、ソーシャルワーカーはクライアントとの関係の中で、クライアントのセルフエンパワーメントに関わってきたと述べており(Simon 1994: 1)、「エンパワーメント」が使われる前には、enable という語が使われてきた(前田 1998)ために、エンパワーメントとイネイブリングが混同されたり(谷口 1999)、エンパワーメントが専門職者によるイネイブリング活動の一形態であるかのように語られる(Adams=2007: 20)場合がある。

一方、わが国の P S W 実践においても、従来から対象者の自己決定権を尊重し、対象者の社会的、文化的背景を理解し、対象者の立場に立つべきであるとされてきた(寺谷 1986: 39・40)。

そもそもエンパワーメントは、ソーシャルワークが医学モデル、病理モデルに傾倒し、問題の原因をクライアントの個人的な要因に求め、サービスの対象者として力を奪ってきたという反省から生まれてきた。エンパワーメント・アプローチが従来の PSW 実践とまったく異なるのは、問題の要因に対する見方を転換し、人と環境のストレングスに注目したこと、パワーの概念を媒介に精神障害をもつ人びととソーシャルワーカーとの対等な

パートナーシップを強調したことである。

ここでの対等なパートナーシップとは、ソーシャルワーカーがそのパワーを、精神障害をもつ人びとに譲りわたすことを意味する。

Hartman は専門職による実践モデルのソーシャルワーカーとクライアント関係においては、パワーはソーシャルワーカーの側にあると指摘する。このソーシャルワーカーのパワーは、組織や機関、専門家としての知識、対人関係におけるパワー、合法的なパワーであり、契約や秘密保持、自己決定の尊重などの努力によっても、パワーをクライアントに委譲させるのは難しいという(Hartman 1993)。Boehm and Staples による調査でも、ソーシャルワーカーの役割については、コンシューマーよりもソーシャルワーカー自身がイニシアチブをとるべきだと述べていた(Boehm and Staples 2002)。Barker は、enabler role について「状況によって生じた一時的なストレスに、クライアントが対処することができるように援助する責任」と説明する(Barker 2003)。このようにイネイブリングには、ソーシャルワーカーがクライアントに対して行う専門的な援助に限った意味ではなく、エンパワーメントはイネイブリングの範囲を脱却していると言える(谷口 1999)。

また、「エンパワーメントのパラドックス」(稲沢 2003, Segal, Silverman and Temkin 1993)の指摘は、実践理念としてのエンパワーメントに必然的に内包されるパラドックスであり、ある人が他の人を意図的にエンパワーしようとする、エンパワーしようとした人がパワーを持つことになり、エンパワーされた人は逆にパワーを失うことになる(Staples 1999: 119, Cowger and Snively 2002: 111, Adams=2007: 19)。ソーシャルワーカーがセルフヘルプ活動によるエンパワーメントの有効性を確認し、このパラドックスをふまえた上でのパートナーシップとはどのようなものか、あるいは実現可能なものかを自らに問い続けることが、クライアントとの対話を深めていく契機の一つとなると考えられる。

浦河べてるの家では、過剰なケアと治療、援助

の常態化により、当事者の生きる力を奪ってきたという反省から、当事者の持つ力と役割を正当に評価し、連携する中で、援助者も当事者も互いに成長する「相互変容過程」「対等性」を再構築してきたという(向谷地 2002)。ここに真のパートナーシップの実践があると考えられる。それは、援助の対象を「障害者と固定せず、常にその場で一番困っている人、励ましや支援を必要としている人」とすることであり、職員と当事者の人間関係を一体的にとらえる「コミュニケーションの一元化」(浦河べてるの家 2002)を基盤とする実践である。精神障害をもった人びとのエンパワーメントを目指すためには、このような実践を参考にしていく必要があるだろう。

2 リカバリー概念や障害学との関連と今後の理論的発展の可能性

リカバリーは「この十年間に起きた精神保健と精神保健サービスの革新的なパラダイム変革」(Corrigan and Ralph 2004: 3)である。リカバリー概念の誕生は以下のように説明される。

第一に、1980年代の脱施設化と地域支援システムの形成、精神科リハビリテーションが基礎となった(Anthony 1991)。精神科リハビリテーションは「長期に渡り精神障害を抱える人がその機能を回復するのを助け、専門家による最小限の介入で、自分の選んだ環境で落ち着き、満足できるようにする」(Anthony, Cohen and Cohen 1983, Anthony, Cohen and Farkas=1993: 14で引用)ことであり、「当事者が効果的に機能するために必要な特定の技能の育成と、当事者の現在の機能を維持・強化するために必要な社会資源の開発である」(Anthony, Cohen and Farkas=1993:14)。第二に、精神保健コンシューマーが自分自身や仲間の回復についての著書を出版する機会が増えたこと、第三にハーディングらによる長期縦断研究によって、統合失調症の回復率がこれまでの研究よりも高いことがわかってきたことである(Anthony 2000)。

アメリカやカナダでは、1990年代後半から州の

精神保健政策にリカバリー概念が導入され始め(木村 2003, 野中 2006)、北米をはじめ、日本での実証研究も始まっている。

これらの実証研究を通して、リカバリーを目的や成果ではなく、過程としてとらえる傾向が強まっており、「病気や健康状態の如何にかかわらず、希望を抱き、自分の能力を發揮して、自ら選択ができるという主観的な構えや指向性を意味する」(野中 2006: 164)。JacobsonとGreenleyは、個人の構え、体験、変化の過程といった内面的状態とリカバリー促進の環境、出来事、政策といった外面的状態の2つから概念モデルを説明した。内面的状態は 希望 癒し エンパワメント 結びつきであり、外面的状態は 人権(力や資源の公平な配分) 癒しの肯定的文化(消費者とサービス提供者との協働関係) リカバリー志向的サービスを挙げた(野中 2006: 166で引用)。このように、リカバリー概念は、個人の主観的な構えや体験だけでなく、リカバリー志向の精神保健プログラムやシステムという政策形成時の視点としても用いられている。

野中やAnthonyは精神科リハビリテーションの流れの中にリカバリーを位置づける。エンパワメントとリカバリーの関連を見ると、エンパワメントはリカバリーの重要な要素として位置づけられる。しかし、リカバリーの一要素としてのエンパワメントは、リカバリー概念自体が個人の体験を重視した主観的な指向性が強いために、個人レベルのエンパワメントが中心となり、集団レベルやコミュニティ・レベルのリカバリーは考えにくい。さらに、政治的変革やソーシャル・アクションのようなGutiérrezらの次元4の活動(Gutiérrez, et al. = 2000: 20, 表1参照)はその活動例としてあげられない(例えばRagins=2005: 54・56)。

一方、1990年代後半に日本に紹介された障害学(disability studies)は、1980年前後以降、イギリスで自らも障害者である研究者、運動家によって発展してきた。エンパワメントと同様に自立生活運動との関連が深い学問であり、運動と研究が

一体となり、運動している点が大きな特徴である。長瀬によると、障害学は「障害を分析の切り口として確立する学問、思想、知の運動」(長瀬 1999: 3)である。また、障害学の中でディスアビリティをめぐる問題を論じた星加は、「ディスアビリティの社会モデル」⁸⁾は、障害当事者のエンパワメントに強い影響をもち、生の肯定に大きな役割を果たしているという(星加 2007: 22・23)。

このように精神科リハビリテーション、障害学ともにエンパワメントと関係の深い理論であるが、障害発生過程についての見解が異なるために、リハビリテーション学と障害学との間で、国際生活機能分類ICF策定をめぐる論争が行われたという(杉野 2007: 47・72)。杉野による論争の整理を紹介し、エンパワメントやリカバリーとの関連について論じたい。

すなわち、1980年の国際障害分類初版は、社会的不利を設定した障害構造論を展開したが、環境因子が「障害」に与える影響を認識していたわけではなく、社会的な「障害」つまり、差別にはほとんど関心がなかった。1990年代から国際障害分類の改訂作業が始まると、障害学の立場からファイファーは、「国際障害分類は障害者に病人役割を割り当てるもので、その意味で障害の医療化を推進し、個人の生活の質について医療専門職が判定する権限をもつことによって、優生思想へと結びつく危険性を孕んでいる」と国際障害分類の廃止を主張した(Pfeiffer 2000, 杉野 2007: 58で引用)。これに対し、リハビリテーション専門家からなるWHOの国際障害分類改訂チーム、とくにピッケンバックらは、「障害」を理論的にとらえるためには、個人に内在的なインペアメントと外在的な社会的障壁との相互関係をとらえることができる国際障害分類の三層構造が優れていると主張し(杉野 2007: 64)、アメリカ障害学の父と言われるゾラの「普遍化モデル」(障害は孤立した特異な人たちに特有な問題だと考えるのは誤りであるという考え)を採用し、ファイファーら障害学からの批判に反論した。この論争について、杉野は国際障害分類改訂チームによるゾラの理論の理解は一面的

であり、都合の良い部分だけ引用していると指摘する。ここでは論争そのものについて論じることは避けるが、リハビリテーション学には障害問題の解決は、個人の適応と環境の改変との相互作用によるという認識はあったものの、個人やミクロな環境への働きかけが中心で、社会全体への働きかけという発想に欠けており、障害学のように差別禁止法などの強制力をもって環境を改変する視点は存在しなかった(杉野 2007: 6)ことが、両者の論点のずれを招いたとも考えられる。

ところで、杉野は障害学の実践課題を「障害者個人ではなく、障害者を取り巻く環境に働きかける『社会モデル実践』を育てていくことと、障害者個人に向けた『個人モデル実践』を利用者主体のサービス供給体制のもとで提供されるように変更していくことの2つに集約される(杉野 2007: 255)と整理する。

この個人モデル実践とは、自立生活運動から生まれ、利用者一人一人のニーズに応じて多様なサービスを提供すべきであり、専門家の裁量を制限して利用者の選択権を保障し、自己決定を尊重することであり(杉野 2007: 255)、この部分においてはリカバリーやエンパワメントの思想と一致する。

リカバリー概念はわが国においても、近いうちに実証研究が進み、精神保健福祉施策や実践における鍵概念となると予測できる。リカバリー概念が言及しないソーシャル・アクションや政治経済レベルのエンパワメントの部分は、障害学の「社会モデル」による実践との関連が整理されることによって、発展していく可能性があると考えられる。

最後に 提言と今後の課題

最後に、エンパワメント・アプローチを実践するとき、留意すべき組織の管理運営について指摘したい。Gutiérrezらは、「これまでヒューマンサービス組織の構造や文化、管理運営は、ワーカーとコンシューマーのエンパワメントをいか

に支援できるかについて注意を払ってこなかった」と、エンパワーメントの実現に向けた組織の管理運営面での修正の必要性を指摘する（Gutiérrez, GlenMaye and DeLois 1995）。

第一に留意すべきなのは、精神障害をもった人びとがプログラム運営に様々な形でかかわることである。

Linhorstらは、精神障害をもつ人々の処遇計画作成への参加によるエンパワーメントを検討した結果、ソーシャルワーカーは、クライアントが処遇計画に参加することを尊重し、選択できる情報を提供し、プログラム全体をエンパワーメント志向に計画し、運営していくことが必要であると結論づけた（Linhorst, et al. 2002）。

第二に、エンパワーメント・アプローチに要する時間について組織の理解を得ることである。エンパワーメントは単独、短期の介入によっては起こらず、長期的で総合的なアプローチが必要であり（久木田 1998）、職員が処遇をゆっくり考え、実行していくための時間的なゆとりが必要であるが（Linhorst, et al. 2002）、特に医療機関のソーシャルワーカーは在院期間の短縮化や外来患者数の増加に伴い、一人の精神障害をもった人とかかわる時間が制約されてしまうのが現状である（栄 2003）。一方、支援に時間がかかるということは、組織にとってはコストの問題となり、組織と資金提供者が実践を特定の形態に押し込める危険性が出てくる（Gutiérrez, Parsons and Cox=2000：300）。組織がエンパワーメント・アプローチの効果と援助に要する時間について認識するよう、ソーシャルワーカーが組織に対して働きかける必要があるだろう。

第三に、エンパワーメント・アプローチを支える組織体制である。すなわち、チームアプローチや協働によるアプローチ、およびスタッフ同士のサポート体制、組織の管理者がエンパワーメント実践を進めるためのリーダーシップをとり、スタッフを支援していく体制があること、組織がスタッフのエンパワーメントを支えることである（Gutiérrez, GlenMaye and DeLois 1995）。

第四に、スタッフの研修・教育体制である。スタッフがカンファレンスを含めた教育や訓練を受け、専門的スキルを身につける機会が必要であり、スタッフのセルフケアが奨励される（Gutiérrez, GlenMaye and DeLois 1995）。栄の調査によると、エンパワーメント実践活動には、ソーシャルワーカー自身の内省的努力と経験との関連が深く、研修参加やスーパービジョンを受ける努力によるスキル向上との関連が推測されている（栄 2003）。

これまでの検討において、以下の2点が不十分であり、今後の課題としたい。

エンパワーメント・アプローチでは、コンシューマー主導を中核的な価値観とするが、心理学においても同様の価値観をもつロジャースのクライアント中心理論がある。しかし、エンパワーメントに関する文献では心理学からの影響について論じているものがほとんどなく、ロジャースの理論と機能主義派のケースワークとが影響を及ぼしあったことしか確認できなかった（Rowe=1999:104-139, Dubois and Miley 1999）。

また、わが国における実践を論じるためには、Hirayamaらが指摘するとおり、日本における抑圧やスティグマの構造、精神医療システムにおけるヒエラルキー構造、対人関係におけるパワーのとりえ方などについて、日本固有の文化や社会背景をふまえた検討が必要であった（Hirayama and Hirayama 1999）が、これも十分に検討できなかった。いずれも今後の課題としたい。

- 1) 「エンパワーメント」の原語はempowermentである。「エンパワメント」と表記する著書や「能力付与」(ジャーメイン他著小島蓉子編訳著(1992)『エコロジカルソーシャルワーク』学苑社)などの訳語もあるが、本論文では小松源助にならい、「エンパワメント」とした。文献を引用又は参考にした部分については原著者、翻訳者の表現にしたがった。またエンパワーメントに関連する用語も、日本語訳のある文献を除いて以下のように小松を参考にして訳した。

Power=パワー、powerlessness=パワーの欠如状態、disempowerment=パワーの脆弱化
先行文献において、ソーシャルワーク実践におけ

- るエンパワーメントは、エンパワーメント・アプローチ (Lee 1994, 小松 1995), エンパワーメント実践 (Simon 1994, Gutiérrez, Parsons & Cox 1998, Hirayama and Hirayama 1999, 三毛 1997), エンパワーメントモデル (Manning 1999) などと表現されている。本論ではソーシャルワークの実践あるいは方法としてのエンパワーメントについては、「エンパワーメント・アプローチ」とし、概念については「エンパワーメント」とした。また、文献を参照した部分については原著者にしたがつた。
- 2) リカバリー (recovery) について、Anthony は次のように述べている。
「回復 (リカバリー) は極めて個人的で独特な過程として描かれる。それは、その人の態度、価値観、感情、目的、技量、役割などの変化の過程である。疾患によりもたらされた制限つきではあるが、満足感のある、希望に満ちた、人の役に立つ人生を生きる道である。回復 (リカバリー) は、精神疾患の破局的な影響を乗り越えて、人生の新しい意味と目的を作り出すことである。」「回復 (リカバリー) は障害を持つ人が行うことである。治療、ケースマネージメント、リハビリテーションは、回復 (リカバリー) を促すために援助者が行うことである。」(Anthony=1998, 括弧内は筆者による)
 - 3) 精神障害をもつ人々の呼称について、US Association of Psychosocial Rehabilitation Services の用語委員会では2004年に person-in-recovery が最もふさわしいとした。本論では person-in-recovery の適切な訳語が見あたらないことから、「精神障害をもつ人びと」と呼ぶこととする。文献を参考、または引用したものについては原著者の表現にならない、それぞれ「クライアント」「コンシューマー」「ユーザー」「精神障害をもった人々」「当事者」とした。なお、翻訳書では consumer を「利用者」と訳しているものもあり、原著が確認できたものは「コンシューマー」に訂正した。
 - 4) Anthony は、リカバリーの視点によるサービスの成果を、「自尊感情、障害への適応、エンパワメント、自己決定といった次元を含める」とし、リカバリーを普遍的にする概念や要素として、希望、医療/治療、エンパワーメント、サポート、教育/知識、セルフヘルプ、スピリチュアリティ、雇用/意味ある活動をあげた (Anthony=1998)。Corrigan and Ralph は、「リカバリーの主要な構成要素はエンパワーメントである」としており (Corrigan and Ralph 2004:11), Ragins もリカバリーの段階として、希望 エンパワメント 自己責任 生活の中の有意義な役割を挙げている (Ragins=2005 : 28・30)。
 - 5) ここで用いたものは DuBois & Miley が伝統的な問題解決と比較したエンパワリング・プロセス (DuBois & Miley 1999 : 212) と Lee によるエンパワリングな援助プロセスの段階 (Lee 1994 : 120・154), Gutiérrez らによるエンパワーメント過程 (Gutiérrez, Parsons & Cox = 2000 : 5・6), 久木田によるエンパワーメント・プロセスのモデルである (久木田 1998)。
 - 6) 「犠牲者への非難」とは、Manning によると、利用者の問題を欠損主義に基づき「技能の欠如、職歴の欠如、対人関係もしくは日常生活技能の欠如、症状管理の欠如、服薬遵守の欠如」として見ることや、利用者の家族について疾患を引き起こした病理的特性をもっている又は問題を助長していることと非難することと説明する (Manning=2000 : 118・119)。栄もほぼ同様の説明をしており、利用者やその家族を「犠牲者」と表現しているが、何の犠牲になっているかは両者とも明示していない。文脈からは従来の医学モデルによる援助システムの犠牲者としての利用者やその家族を非難することと推察できる。
 - 7) ここで用いたのは Chamberlin による「精神障害をもった人々のユーザー主導セルフヘルププログラムへの参加に関する研究」(Chamberlin 2005), Manning, Zibalese-Crawford and Downey (1994) による「コンシューマーのエンパワーメント経験」, Manning, Parsons and Silver (1997) の「エンパワーメントのコンシューマーモデル」(Manning らの2つの研究は Manning 1999 で引用), 田中による「精神障害者のエンパワーメントに関する実証的研究」(田中 2001) である。
 - 8) 障害学はその「障害」を個人の属性ではなく、社会の障壁としてとらえることを理論的基盤とする。これを「社会モデル」と呼んでいる。

引用文献

- Anthony, W., Cohen, M. and Farkas, M. (1990) *Psychiatric Rehabilitation*. Boston University, Center for Psychiatric Rehabilitation. (= 1993, 高橋亨・浅井邦彦・高橋真美子訳『精神科リハビリテーション』マイン.)
- Anthony, W. (1993) Recovery from mental illness: The guiding vision of the mental health service system in the 1990's, *Psychosocial Rehabilitation Journal*. 16 (4), 11-23 (=1998, 濱田龍之介訳・解説「精神疾患からの回復: 1990年代の精神保健サービスシステムを導く視点」『精神障害とリハビリテーション』2 (2), 145・154)

- Anthony, W. (2000) A Recovery-Oriented Service System: Setting Some System Level Standard, *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 24 (2), 159 - 168.
- Adams, Robert (2003) *Social Work and Empowerment: Third Edition*, Palgrave Macmillan. (=2007, 杉本敏夫・斉藤千鶴監訳『ソーシャルワークとエンパワーメント 社会福祉実践の新しい方向』ふくろう出版.)
- Barker, Robert (2003) *The Social Work Dictionary 5th ed.* NASW Press.
- Boehm, Amnon and Staples, H. Lee (2002) The Functions of the Social Worker in Empowering: The Voices of Consumers and Professionals, *Social Work*, 47 (4), 449 - 460.
- Browne, Colette, V. (1995) Empowerment in Social Work Practice with Older Women, *Social Work*, 40 (3), 358 - 364.
- Chamberlin, Judi (2005) A Working Definition of Empowerment, (http://www.power2u.org/empower/working_def.html, 2005. 9. 20).
- Cowger, Charles D. and Snively, Carol A. (2002) Assessing Client Strengths, Individual, Family, and Community Empowerment, Saleebey, Dennis Ed. *The Strengths Perspective in Social Work Practice, 3rd ed.* Allyn and Bacon, 106 - 123.
- Cox, Enid O. (1989) Empowerment of the Low Income Elderly Through Group Work, *Social Work with Groups*, 11 (4), 111 - 125.
- Cox, Enid O. and Parsons, Ruth J. (1994) *Empowerment-Oriented Social Work Practice with the Elderly*. Brooks / Cole Publishing Company.(=1997, 小松源助監訳『高齢者エンパワーメントの基礎 ソーシャルワーク実践の発展を目指して』相川書房.)
- DuBois, Blenda & Miley, Karla (1999) *Social Work an Empowering Profession, 3rd ed.* Allyn and Bacon.
- Gutiérrez, Lorrain M. (1990) Working with Women of Color : An Empowerment Perspective, *Social Work*, March 1990, 149 - 153.
- Gutiérrez, Lorrain M., GlenMaye, Linnea, and DeLois, Kate (1995) The Organizational Context of Empowerment Practice: Implications for Social Work Administration, *Social Work*, 40 (2), 249 - 258.
- Gutiérrez, Lorrain, M., Parsons, Ruth J. & Cox, Enid O. Eds. (1998) *Empowerment in Social Work Practice: A Sourcebook*. Brooks Cole Publishing Company. (=2000, 小松源助監訳『ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント』相川書房.)
- Hamilton County Community Mental Health Board recovery website, Recovery: Definition & Components, (<http://www.mhrecovery.com/definition.html>, 2005. 11. 5.)
- Hartman, Ann (1993) The Professional Is Political, *Social Work*, 38 (4), 365 - 366, 504
- 狭間香代子 (2001) 『社会福祉の援助観』筒井書房.
- 濱田龍之介 (2001) 「評価の領域と評価技法 4 . ストレングスの評価」『精神障害とリハビリテーション』5 (2), 112 - 115.
- Hirayama, Hisashi and Hirayama, Kasumi (1986) Empowerment Through Group Participation: Process and Goal, Parnes, Marvin Ed. *Innovation in Social Group Work: Feedback from Practice to Theory*. The Haworth Press. 119 - 131.
- Hirayama, Hisashi and Hirayama, Kasumi (1999) Cross-Cultural Application of Empowerment Practice: A Comparison between American and Japanese Groups, Wes Shera and Lillian M. Wells Eds. *Empowerment Practice in Social Work*. Canadian Scholars' Press Inc. 246 - 258.
- 平山尚・平山佳須美・黒木保博・宮岡京子 (1998) 『社会福祉実践の新潮流』ミネルヴァ書房.
- 星加良司 (2007) 『障害とは何か ディスアビリティの社会理論に向けて』生活書院
- 稲沢公一 (2003) 「エンパワーメント」『精神科臨床サービース』3, 423 - 427.
- 木村真理子 (2003) 『リカヴァリを促進する精神保健システム 専門職と当事者のパートナーシップを求めて』『精神保健福祉』34 (4), 309 - 314.
- 小松源助 (1995) 『ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント・アプローチの動向と課題』『ソーシャルワーク研究』21 (2), 76 - 82.
- 久保美紀 (1995) 「ソーシャルワークにおける Empowerment 概念の検討」『ソーシャルワーク研究』21 (2), 93 - 99.
- 久保美紀 (2001) 『エンパワーメント概念の構造に関する研究』『明治学院大学論叢社会学・社会福祉学研究』110, 175 - 195.
- 窪田暁子 (1995) 「アルコール依存症者の回復をエンパワーメントの視点からみる」『ソーシャルワーク研究』21 (2), 83 - 92.
- 久木田純 (1998) 『エンパワーメントとは何か』久木田純・渡辺文夫編『現代のエスプリ376, エンパワーメント』10 - 34.
- Lee, Judith A. B. (1994) *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Columbia University Press.
- Lee, Judith A. B. (1996) *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Turner, Francis J. ed. *Social Work Treatment 4th ed.* The Free Press. 218 - 249.(= 1999, 林浩康訳「エンパワーメント・アプローチ」米本秀仁監訳『ソーシャルワーク・トリートメント相互連結理論アプローチ上』中央法規出版, 338 - 385.)

- Lee, Judith A. B. (2001) *The Empowerment Approach to Social Work Practice, 2nd ed*, Columbia University Press.
- Linhorst, Donald M., Hamilton, Gary, Young, Eric, and Eckert, Anne (2002) Opportunities and Barriers to Empowering People with Severe Mental Illness through Participation in Treatment Planning, *Social Work*, 47 (4), 425 - 434.
- 前田ケイ (1998) 「SST のグループワーク実践におけるアドボカシーとエンパワーメント」『社会福祉研究』72, 19 - 25.
- Manning, Susan M. (1998) Empowerment in Mental Health Program, Gutiérrez, Parsons & Cox Eds., *Empowerment in Social Work Practice: A Sourcebook*. Brooks Cole Publishing Company. (=2000, 小野景子訳「精神保健プログラムにおけるエンパワーメント」小松源助監訳『ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント』相川書房. 115 - 141.)
- Manning, Susan M. (1999) Building an Empowerment Model of Practice through the Voice of People with Serious Psychiatric Disability, Shera, Wes and Wells, Lilian M., Eds. *Empowerment Practice in Social Work*. Canadian Scholars' Press Inc. 102 - 118.
- 三毛美予子 (1997) エンパワーメントにおけるソーシャルワーク実践の検討』『関西学院大学社会学部紀要』78, 169 - 185.
- Miley, Karla & DuBois, Blenda (1999) Empowering Processes for Social Work Practice, Shera, Wes and Wells, Lilian M. Eds. *Empowerment Practice in Social Work*. Canadian Scholars' Press Inc. 2 - 12.
- 向谷地生良 (2002) エンパワーメントの仲間力 浦河における精神科リハビリテーションプログラムへの当事者参加の現状と意義』『精神療法』28 (6), 698 - 711.
- 長瀬修 (1999) エンパワーメントに向けて』石川准・長瀬修編著『障害学への招待』明石書店. 11 - 39.
- 野中猛 (2006) エンパワーメントとリハビリテーション論 リカバリーへの道』岩崎学術出版.
- 大谷京子 (2004) エンパワーメントと精神障害者福祉実践におけるエンパワーメント』『関西学院大学社会学部紀要』6 (1), 245 - 256.
- Parsons, Ruth J. (1991) Empowerment: Purpose and Practice Principle in Social Work *Social Work with Groups* 14 (2), 7 - 21.
- Pernell, Ruby B. (1986) Empowerment and Social Group Work, Parnes, Marvin Ed., *Innovation in Social Group Work Feedback from Practice to Theory*, The Haworth Press. 107 - 117.
- Ragins, Mark (2002) *A Road to Recovery*, Mental Health Association in Los Angeles Country. (=2005, 前田ケイ監訳『ビレッジから学ぶリカバリーへの道』金剛出版.)
- Ralph, Ruth O. and Corrigan, Patrick W. Eds. (2004) *Recovery in Mental Illness Broadening Our Understanding of Wellness*, American Psychological Association Washington, DC.
- 栄セツコ (2003) エンパワーメントアプローチに基づく精神保健福祉実践活動』『精神保健福祉』34 (4), 341 - 350.
- 栄セツコ (2005) 精神障害者エンパワーメント・アプローチ・パワーの喪失に関連する要因』『桃山学院大学社会学論集』39 (1), 153 - 173.
- Saleebey, Dennis (2002) The Strengths Approach to Practice, Saleebey, Dennis Ed., *The Strengths Perspective in Social Work Practice Third Edition*. Allyn and Bacon. 80 - 94.
- Segal, Steven P., Silverman, Carol and Temkin, Tanya (1993) Empowerment and Self-help Agency Practice for People with Mental Disabilities, *Social Work*, 38 (6), 705 - 712.
- Simon, Barbara L. (1994) *The Empowerment Tradition in American Social Work*. Columbia University Press.
- Solomon, Barbara (1976) *Black Empowerment, social work in oppressed communities*, Columbia University Press.
- Staples, Lee H. (1999) Consumer Empowerment in a Mental Health System: Stakeholder Roles and Responsibilities, Shera, Wes and Wells, Lilian M. Eds., *Empowerment Practice in Social Work*. Canadian Scholars' Press Inc. 119 - 141.
- Stormwall, Layne K. (2002) Is Social Work's Door Open to People Recovering from Psychiatric Disabilities? *Social Work*, 47 (1), 75 - 82.
- 杉野昭博 (2007) 『障害学 理論形成と射程』東京大学出版会.
- 田中英樹 (2001) 『精神障害者の地域生活支援 統合的生活モデルとコミュニティソーシャルワーク』中央法規.
- 谷口政隆 (1999) エンパワーメントと社会福祉実践におけるエンパワーメント』『社会福祉研究』75, 49 - 56.
- 寺谷隆子 (1986) 『PSW の技術』柏木昭編著『精神医学 ソーシャル・ワーク』岩崎学術出版, 39 - 44
- 浦河べてるの家 (2002) 『べてるの家の「非」援助論 そのままでいいと思えるための25章』医学書院.
- Rapp, Charles A., Shera, Wes and Kisthardt, Walter (1993) Research Strategies for Consumer Empowerment of People with Severe Mental Illness, *Social Work*, November 1993, 727 - 735.
- Rapp, Charles A. (1998) *The Strengths Model Case Management with People Suffering from Severe and Persistent Mental Illness*. Oxford University Press. (=1998,

- 江畑敬介監訳『精神障害者のためのケースマネジメント』金剛出版.)
- Rapp, Charles A. and Goscha, Richard J. (2004) The principles of effective case management, *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 27 (4), 319-333.(=2004, 濱田龍之介訳「効果的なケースマネジメントの原則」『精神障害とリハビリテーション』8(2), 144-154.)
- Rowe, William (1996) Client-Centered Theory: A Person-Centered Approach, Turner, Francis J. Ed. *Social Work Treatment 4th ed.* The FreePress. (=1999, 相場幸子訳「クライアント中心理論：人間中心のアプローチ」米本秀仁監訳『ソーシャルワーク・トリートメント相互連結理論アプローチ上』中央法規出版, 104-139.)
- 和気純子(2005)「エンパワーメント・アプローチ」久保紘章・副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル 心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店, 205-226.
- Zippay, Allison (1995), The Politics of Empowerment, *Social Work*, 40 (2), 263-267.

A Study of Empowerment Approach in Mental Health Field

Kodera, Kuniko

The empowerment approach has received a great deal of attention recently in the mental health field. Empowerment is the process where stigmatized and disempowered people, groups and communities gain or develop individual, interpersonal and / or political power. In the mental health field, this approach encourages the participation, of those who are mentally challenged in various aspects of organizational operations. This approach emphasizes the strength of the person and the environment and also recognizes the importance of partnership with the social worker. In the concept of recovery, empowerment is one of the important factors of recovery. Recovery places importance upon the personal experience and the subjective nature of that experience but, reference to empowerment at a community level or a political level has been limited. In the future, I hope to develop the concept of recovery as it relates to the theory on disability studies.

Key Words : empowerment approach, power, strength, recovery, mental health

表1 基本的な問題解決のための活動

次元1 ワーカー・クライアント 関係の構築； 当面のニーズの充足	次元2 教育 技能の発達 セルフヘルプ	次元3 資源の確保； システムのアセスメント	次元4 ソーシャル・アクション 州・連邦・国際レベルで の政治的（マクロ）変革
<p>個人 / 家族を既存サービスにつなぐ</p> <p>意識高揚プロセスを開始する</p> <p>資源をいかに見つけ出し、要求するかについて実際に学習する</p> <p>基本的な参加者 個人 家族 ワーカー</p> <p>基本的な変革の目標 個人 家族</p>	<p>知識を高める</p> <p>問題解決の身体的、心理的、社会的側面</p> <p>権利擁護や媒介のように新しい技能を開発する 選定された問題に特有な知識 共通の問題や解決に取り組むためのグループを活用する 他者を援助することによって自己を援助する 相互に問題解決していく技能</p> <p>個人 家族 小グループ ワーカー</p> <p>個人グループの状況 「共通の問題解決」</p>	<p>資源、組織に関する知識を発達させる</p> <p>専門職や組織とのコミュニケーション技能の形成</p> <p>組織や地域を変革する技能の形成 組織の変革への参加</p> <p>意思決定機関や機会への参加</p> <p>正式なセルフヘルププログラムや組織の創設や加入</p> <p>個人 家族 小グループ 大規模グループ 問題に焦点をあてたネットワーク</p> <p>団体 機関 個人 「共通の問題」</p>	<p>政治経済システムの国家的問題に関する知識を発達させる</p> <p>国家的問題(マクロ)に取り組み、組織と協力していくためにに関する技能の習得</p> <p>個人的問題の政治的性質の明確化 手紙・電話キャンペーン 交渉、媒介 要請行動や監視行動</p> <p>個人 家族 小グループ 大規模グループ 地域 全国団体 地域/州の団体</p> <p>大規模グループ 地域 法律 政策 地方政府 州政府 連邦政府</p>

Gutiérrez, Parsons & Cox (1998) A Model for Empowerment Practice, Gutiérrez, Parsons & Cox eds. *Empowerment in Social Work Practice: A Sourcebook* Brooks Cole Publishing Company, =2000, 小松源助監訳『ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント』相川書房. p20 表1 . 1 基本的な問題解決のための活動（和訳）を引用

表2 精神保健福祉分野のエンパワーメントにおいて重要な構成要素

Chamberlin (2005)	Manning, Zibalese-Crawford and Downey (1994)	Manning, Parsons and Silver (1997)	田中英樹 (2001)
精神障害をもった人々にとってのユーザー主導のセルフヘルププログラムへの参加についての調査研究	「コンシューマーのエンパワーメントの経験」	「エンパワーメントのコンシューマーモデル」	「精神障害者のエンパワーメントに関する実証的研究 精神障害者の聞き取り調査を通して」
コンシューマー / サバイバーセルフヘルプ実践家との議論によって、エンパワーメントの定義づけを試みた。	コンシューマーと家族メンバーが調査者として訓練された。調査対象者はコンシューマー、家族、供給者。 11のグループインタビュー、個人インタビュー、3つのドロップインセンターでの参与観察をもとに質的な分析を行った。	フォーカスグループと個人インタビュー。フォーカスグループは4つの異なるプログラムのクライアントのグループと2つの専門家のグループで実施。個人インタビューはピアカウンセラーの訓練者とクリニックのエグゼクティブディレクターに実施。	実名で社会的に活躍している精神障害者で、セルフヘルプ活動の担い手から全国的分布を考慮して10名を選定し、聞き取り調査を実施。
特 質 意思決定力を持つこと 情報と資源へのアクセス 選択の幅があること（二者択一ではなく） 自己主張 個々人が違いを感じることに（希望がある） 批判的に考えること、コンディションを整えることを学ぶこと 学ぶこと、怒りを表現すること 孤独を感じるのではなく、グループの一員であること 権利があることを理解する 人生とコミュニティの変化をもたらす コミュニケーションなどのスキルを学ぶこと 能力と可能性についての認知を変えること カミングアウト 成長と変化 ポジティブな自己イメージを増し、スティグマを乗り越える。	重大なエンパワーメントのテーマ 自己決定 意思決定 情報 / 教育 尊重 参加 / 所属 他の人への貢献 「カミングアウト」 エンパワーメントの障壁 貧困 孤独 スティグマ 精神障害の影響 施設化の計画されたものでない影響 パワーの不平等な配分	3つのカテゴリ 自覚 環境について学ぶこと 戦略 5つの特質（精神保健におけるエンパワーメントモデルの哲学的な要素を表現） 信頼性 パワー 機会 関係性 関連性 エンパワーメントモデルの構成要素 エンパワーメントの意識は、エンパワーメントを作り出す供給者、クライアント、家族の態度、価値、役割行動を示す。 態度 価値・信念 役割 周囲の状況について学ぶ コンシューマーガバナンス（管理） 援助者としてのコンシューマー協働 発展的な視点 フィードバックループ リーダーシップ、クライアント主導、教育 / 情報、意味ある参加、全人的、賞賛のようなエンパワーメント戦略	開かれた性格 病識の存在 出発として怒りと疑問 実践と学習 生活体験の蓄積 現存する未来との出会い 実名でのスピークアウト 講演・執筆活動 等身大の評価 セルフヘルプグループの存在 社会的な役割獲得 価値観の変容 よき専門家との出会い 身近な理解者の存在 希望の存在 広がる仲間 良質な医療の継続（隠しオブジェクト）

